

科目名		職業病態学特別論文指導	
科目責任者	森本 泰夫	(呼吸病態学 教授)	
担当者	河井 一明	(職業性腫瘍学 教授)	
担当者	和泉 弘人	(呼吸病態学 准教授)	
担当者	李 云善	(職業性腫瘍学 准教授)	
開講時期:	1～3年次	単位数:	8 単位
<p>● 科目の教育目標</p> <p>一般目標 (GIO)</p> <p>自らが積極的に職業性疾患の病態モデルやスクリーニングモデル等の分子生物学的アプローチを介した病態解析を集積し、論文を作成して総合的に研究の推進を主体的に行う。</p> <p>行動目標 (SBOs)</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 職業性疾患のテーマを自らみいだすことができる。</li> <li>2) 分子生物学的アプローチの手法を自らみいだすことができる。</li> <li>3) 分子生物学的アプローチの手法の意義をみいだすことができる。</li> <li>4) 自分のテーマにおいて職業性肺疾患の意義を主体的にみいだすことができる。</li> <li>5) 自分のテーマにおける分子生物学的手法の意義を主体的にみいだすことができる。</li> <li>6) 自分のテーマにおける分子生物学的手法を用いた解析を主体的に実施できる。</li> <li>7) 職業性疾患において分子生物学的アプローチの応用を主体的に論述できる。</li> <li>8) 職業性疾患において分子生物学的アプローチ解析の応用を主体的に論述できる。</li> <li>9) 自分のテーマにおける職業性疾患の分子生物学的手法の解析の応用を主体的に論述できる。</li> <li>10) 国内外の職業性疾患における分子生物学アプローチの意義を主体的に論述できる。</li> </ol>			
● 評価方法	論文作成のための仮説(20%)、試験のデザイン(10%)、結果のまとめ(10%)、討論(30%)を総合的に評価するとともに、論文を完成(30%)させる。		
● 参考文献	自らが積極的に参考文献を検索・知識の集約を行うが、指導の中で必要に応じ紹介する。		

● 授業計画(適宜個別対応)

内容	担当教員
研究テーマにおいて得られた結果の解釈の仕方について、自らが主体的に行うが、必要に応じ科学的論理思考ができるように指導する。	森本 河井 和泉 李
カンファレンス、抄読会等を介して、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の更なる充実化を図るとともに、自身の研究テーマとの整合性等を主体的に検証させ、報告書や論文における考察する能力を養う。	森本 河井 和泉 李
研究テーマにおいて得られた結果のまとめ方の論文作成を主体的に行われるが、必要に応じ指導を行う。	森本 河井 和泉 李

● 授業内容

<p>(概要)</p> <p>研究テーマにおいて得られた結果を、自らが主体的に、データの妥当性や信頼性を検証し、問題の分析、調査、論理的思考能力を養う。このような過程を繰り返して研究のまとめを行う。論文の執筆においては、論文の独創性・科学的意義を遂行しつつ、結果から導き出された新たな事実を検証し、完成させる。これらを通して自ら科学的に問題を発見し、解決する能力を養成する。</p> <p>(森本 泰夫)</p> <p>様々な職業性肺疾患の肺障害の特徴や炎症・線維化を含めた多岐にわたる発生機序や病態生理を自らが主体的に検討させ、自らが研究テーマや研究の意義を見いだせるように指導する。また、研究テーマにおける分子生物学的アプローチの意義を検討させ、カンファレンス、抄読会等を介して研究テーマの科学的意義の更なる検証を図り、プレゼンテーションやコミュニケーション能力の更なる充実化を図る。実験により得られた結果と様々な職業性肺障害の特徴等の整合性等を主体的に検証させ、科学的論理思考が十分に養成できるよう指導を行う。</p> <p>(河井 一明、李云善)</p> <p>職業・環境発がんの予防をテーマに、発がん物質の検出や発がん要因の抽出、発がんメカニズムの解明の為の研究を自ら計画・立案し実施できる知識と能力を身につける。加えて、職業的発がんのリスク評価・マネージメントを実施・指導できる能力を習得する。さらに、研究結果を社会に向けて公表できる素養として、その独創性・科学的意義を考慮した学術論文を独自に執筆できる能力の獲得とプレゼンテーション及びコミュニケーション能力の向上を図る。</p> <p>(和泉 弘人)</p> <p>肺がんや悪性胸膜中皮腫を中心に悪性肺腫瘍の発生原因とその予防についての基本的な考え方を学び、職業性肺疾患に関わる研究テーマを自主的に決める。研究テーマに関わる生命現象を、ゲノム科学の観点から情報を収集分析し、自ら新たな仮説を立てる。仮説を実験で検証するために分子生物学的手法を習得する指導と結果を解釈する力を育てる指導を行う。仮説の検証を繰り返すことで生命現象の真理を科学的に議論し基本原理の発見を目指す重要性を学ぶ。また、論文紹介や論文作成などを通して「結果」は事実であり「考察」は事実に基づく推論であることを学ことでプレゼンテーション能力を高める指導を行う。</p>
---